

# 生産資本循環における「恐慌の考察に さいして重要な点」に関する一考察

宮本義男

まえおき

『資本論』第2巻第1篇「資本の転形とその循環」および第2篇「資本の回転」は、これまでの恐慌論の研究にさいして殆んど顧みられなかったとい  
ってよい。恐慌論の研究といえば、大半が第3篇「社会総資本の再生産と流  
通」、とりわけ、その集約としての再生産表式の分析に焦点をあてるのが常  
識だった、といっても過言ではない。

そして表式分析にさいして、表式の均衡条件を乱すものとして、いわゆる  
「命がけの飛躍」と呼ばれる  $W-G$  の実現問題が、表式との関連で検討され  
るのが、山田盛太郎『再生産表式分析序論』以来の伝統だ、といつてよかろ  
う。

恐慌論研究の中心が再生産表式に置かれる場合、『資本論』第2巻第1篇  
と第2篇は、全くといってよいほど、研究の対象外に置かれていた。もっと  
も、このことは『資本論』第3巻第3篇「利潤率の傾向的低下法則」につい  
てもいえるのだが、第2巻第1篇第2篇の場合とは異なって、関説した論者  
が皆無というわけではない。しかし、この場合でも、再生産表式分析一辺倒  
よりは、恐慌論の解明において一歩進んではいるものの、資本の循環、回転  
論に触れていないために、恐慌論の核心を剔るという点で、なお不明確さを  
免れていない、といわざるをえない。

表題に掲げた「生産資本循環における“恐慌の考察にさいして重要な点”に関する一考察」は、たんに「命がけの飛躍」 $W-G$ の具体化というだけでなく、社会総資本の再生産と流通の集約としての再生産表式の内容を深めるだけでなく、『資本論』第3巻第3篇で展開される「利潤率の傾向的低下法則」と恐慌論との関連を、より明確に浮彫りにするという点で、きわめて重要な役割を果たすということを反省する一つの試みにほかならない。

## 1

さて、「生産資本循環における“恐慌の考察にさいして重要な点”」とは『資本論』第2巻第1篇第2章「生産資本の循環」第1節「単純再生産」で展開されている次の一節である。

「 $W'$ はそれが売られて、貨幣に転化されていけば、労働過程の現実の諸要因に、したがってまた再生産過程のそれに、転化されうる。だから、 $W'$ が最終消費者によって買われているか、それを転売しようとする商人によって買われているかは、直接には少しも事態を変えるものではない。資本主義生産によって生産される商品量の大きさは、この生産の規模と、これを絶えず拡大しようとする欲望とによって規定されるのであって、需要と供給の充足さるべき諸欲望の予定された範囲によって規定されるのではない。大量生産は、その直接の買い手としては、他の産業資本家のほかには、卸売商人をもちうるのみである。再生産過程は、そこから突き出された商品が、現実に個人的または生産的消費に入っていないか、一定の限界内では、同じ規模かまたは拡大された規模で進行しうる。商品の消費は、その商品が出てきた資本の循環中には含まれていない。たとえば、ひとたび糸が売られたならば、売られた糸がさしあたりどうなろうとも、糸で表示された資本価値の循環は、あらためて始まりうるのである。生産物が売られるかぎり、資本家の生産者の立場からすれば、すべてが順調に進行しているのである。彼が代表

する資本価値の循環は、中断されない。そして、もしこの過程が拡大されているならば——それは生産手段の生産消費の拡大を含む——、この資本の再生産は、労働者の個人消費（したがって需要）の拡大を伴っていることがありうる。なぜかといえば、この過程は、生産消費によって開始され媒介されているからである。かくして、剰余価値の生産も、それとともに資本家の個人消費も増大し、全再生産過程がきわめて隆盛な状態にありながら、しかも諸商品の一大部分はただ外見上消費に入ったにすぎず、現実には売れないで転売者の手に滞留し、したがって実際にはまだ市場にある、ということもありうる。いまや商品の流れが次から次へと続き、ついには、以前の流れが、外観的にしか消費に呑み込まれていないことがわかる。商品資本が市場でたがいに席を争う。あとからくるものは、売るために価格以下で売られる。先の流れがまださばけていないのに、それにたいする支払期限が到来する。その持主たちは、支払不能を宣言するか、または支払うためにどんな価格でも売るか、しなければならない。この販売は、現実の需要状況とは全然関係がない。それはただ、支払にたいする需要に、商品を貨幣に転化する絶対的必要に、関係があるだけである。そこで恐慌が始まる。恐慌が明瞭になるのは、消費需要、すなわち個人消費のための需要の直接の減少においてではなく、資本対資本の交換の減退、資本の再生産過程の減退においてである。』<sup>1)</sup>

ここでとくに注目すべきは、最後の一節であろう。すなわち、「恐慌が明瞭になるのは、消費需要、個人消費のための需要の直接の減少においてではなく、資本対資本の交換の減退、資本の再生産過程の減退」という個所である。これに先立つ文脈から言えることは、生産過程の運動と流過程における実現は、それぞれ独自の運動を行なう、という指摘がまずあり、つづいて、再生産過程の運動は資本対資本の交換にもとづく、という結論が導き出される。

もっとも、このことは個人消費を全く無視してもよい、ということではない。『資本論』第2巻第1篇全篇を通じて、資本の循環は、一般商品流通の

なかで行なわれる、という文言がしばしば現われる。資本の循環は、この一般商品流通のなかで、資本循環の制約を受けながら行なわれる。資本の循環は、貨幣資本、生産資本、商品資本の間で、循環の間断ない継続のために、一定の比率を保ちながら、しかも一定の価値水準を前提として行なわれなければならない。このことは資本の循環を念頭に浮べるさいの常識であろう。

いいかえれば、資本の循環は、資本循環上の一定の諸条件のもとで、一般商品流通と絡みあって継続されねばならない。

ところで、一般商品流通に組み込まれている個人消費は、きわめて気紛れなものである。個人が手にしている貨幣は、退蔵される可能性があるだけでなく、一度に全額使用される必然性はない。時期を変え分割して使用される場合もある。このために『資本論』第1巻第3章「貨幣または商品流通」第2節「流通手段」(a)「商品の形態転換」においては、個人消費のこの傾向が、商品流通の連鎖を断ち切る可能性をもつものとして「恐慌の可能性」の一つに数えられているのである。

生産を規定するものは終局的には消費であるとしても、このような不安定な個人消費を前提として資本主義的大量生産が可能である筈はない。「資本主義生産によって生産される商品量の大きさは、この生産の規模と不断にこれを拡張しようとする欲望とによって規定されるのであって、需要と供給の、充足さるべき諸欲望の、予定された範囲によって規定されるのではない。大量生産は、その直接の買い手としては、他の産業資本家のほかには、卸売商人をもちうるのみである」と、断定されているのは、このためである。

商業資本が発展すれば、産業資本家相互の直接取引も影を潜めるから、以上の一文は、「大量生産は、その直接の買い手として卸売商人をもちうるのみである」といいかえても、決して行き過ぎではないであろう。

そうだとすれば、生産過程を担当するものは産業資本であり、流通過程を代表するものは商業資本ということになる。

ここからさらに次の結論が導き出せる。産業資本は一たび商品を商業資本に売り渡せば、その循環を継続するということであり、商業資本は商業資本で、商品が最終消費者の手に渡らなくても、転売だけで循環を持続するという現象が起る、ということである。転売によるだけでも商業資本の循環が行なわれるかぎり、投機的な「流通在庫」すら形成されるだろう。「流通在庫」と「過剰在庫」の境界線の設定が難しいだけに、ある一定の限度内においては、「過剰在庫」の形成すらも生産過程の活動を刺戟することもあろう<sup>2)</sup>。

いずれにしても、このことは生産過程と流通過程は相互に依存しながら、他方では独自の運動を行ないうるという、いわば、二つの過程の統一と対立を表現している、といてよいであろう。しかも、商業資本によって代表される需要は、最終消費とは間接的にしか結びついていない「仮空需要」であることに留意しなければならない。

つまり資本主義的大量生産は、商業資本が想定する「仮空需要」にもとづいてのみ可能なのであって、この「仮空需要」が最終消費に転化するかどうかとは別個に、生産過程における資本の循環が行なわれるのである。

したがって、流通過程においては、二つの需要、すなわち、商業資本による「仮空需要」と、最終消費による、いわば「最終需要」＝「終局需要」があるということ、いいかえれば、「仮空需要」による商品価値実現と、「最終需要」による商品価値実現という、二つの実現形態があることに注意する必要があるであろう。

念のために触れておけば『資本論』第2巻第2章「生産資本の循環」第1節「単純再生産」の他の箇所には、次のような言及がある。

「糸が商人に売られた後には、それはそれを生産した資本の循環過程からは離れているが、それにもかかわらず、引続き商品として一般流通の圏内にある。同じ商品量の流通が紡績業者の資本の独立の循環における一要因をなすことをやめたにもかかわらず、依然として同じ商品量の流通が継続する。だから、資本家によって流通に投ぜられた商品量の現実の最終的な形態転

換，W—G，その消費への終局的脱落は，この商品量が，彼の商品資本として機能する形態転換からは，時間的および空間的に全く分離されていることがありうる。資本の流通においては，すでになされた同じ形態転換が，一般流通の部面では，これからなされる。」<sup>3)</sup>

さきに「恐慌の考察にさいして重要な点」とのべたのは，実は流通過程における，このような「需要」の二重構造，「商品価値実現」の二重構造なのであって，この二重構造を基底にして，生産過程と流通過程の対立と統一が形成されているところに，資本の再生産過程の特色がある，とあってよからう。この点は，これまでの「資本の流通過程」の研究，「資本の循環」の考察にさいして大方の論者が見落してきた点である。

しかし，いうまでもなく，資本主義生産にとって，さしあたって重要な点は，流通過程を構成する二重構造のうち，商業資本による「仮空需要」であり，商業資本による「商品価値の実現」である。この点は改めて強調する必要はなからう。商業資本による「仮空需要」がなければ，資本主義的大量生産は不可能に近いといっても言い過ぎではない。この点を踏まえておれば，「恐慌が明瞭になるのは，消費需要，すなわち個人消費のための需要の直接の減少においてではなく，資本対資本の交換の減退」という指摘も，自ずと理解することができるであろう。

## 2

さて，以上において，「生産資本循環における“恐慌の考察にさいして重要な点”」とは，流通過程の二重構造を念頭においたうえでの，生産過程と流通過程の対立と統一の理解である，と指摘しておいた。

この点をさらに一步進めて検討すれば，次のようにのべることができよう。

およそ，いかなる経済体制においても，生産と消費（最終消費）は，なんらかの形態において一致すべきものである。社会の再生産過程は，それを絶

対的条件として営まれる。このことは資本主義生産体制においても変わりはない。ただ、資本主義生産体制においては市場価格の変動を媒介にして再生産過程が営まれ、生産と消費の一致が図られるのである。いいかえれば、生産過程において形成された商品価値を価格として表現することによって価値の実現、つまり販売を図ろうと試みる。商品価値に等しい価格で販売されれば生産と消費とは一致していたことを示すことは、いうまでもない。商品価値を価格という形態をとらせることによって、生産と消費の一致を試みようとする、ともいえるであろう。この意味では価値と価値形態＝価格形態とは、資本主義生産体制を含む商品生産社会の生産と流通、生産と消費との関係をまさに商品と貨幣の形態で表現するものだといってよい。しかし、生産と流通、生産と消費の関係を、商品と貨幣の形態、価値と価格の形態で表現するという、商品生産社会独自のこの様式は、同時に、価格の価値からの背離の可能性を含んでいることに注意しなければならない。価格が商品と貨幣による二つのものの相対的表現ということのうちに、価値と価格の量的不一致の可能性が潜んでいることは、価値形態論を学んだものにとっては、常識であろう。それだけではない。価格とは商品が交換を望んでいる表現であって、必ずしも交換されるということを表わすものではない、ということも、もちろんのことである。「価格は、貨幣と引き換えに、商品を譲渡する可能性と必然性を含む」<sup>4)</sup>というのは、このような意味であろう。

さて、商品価値と価値形態＝価格形態との関係が以上のように理解しうるとすれば、この関係は、生産過程と二重構造をもつ流通過程との間に、どのように適用しうるであろうか。

生産過程が商品価値の形成過程であり、流通過程が商品価値の実現過程であることは、いうまでもない。もっとも、流通過程の二重構造によって商品価値の実現過程が「仮空需要」による実現過程と「最終需要」による実現過程の二段階に分かれることは、改めて指摘するまでもなからう。

すでにのべたように生産＝消費であれば、価値＝価格である。だが、商品

生産社会においては、結果としては、そうなるべきであるとしても、結果に到る過程はそうではない。市場価格の変動を通して生産＝消費、価値＝価格の結果がもたらされる。

そして流通過程における商業資本の「仮空需要」こそが、市場価格の変動をもたらし、それを媒介にして、価値＝価格の結果を導き出す媒介環の役割を果たすのである。これは資本主義的大量生産が担う宿命といわねばなるまい。

価値→価値形態＝価格形態という価値形態論の図式が、ここでは生産過程＝商品価値→流通過程＝価値形態＝価格形態という図式に具体化される。しかも、価格形態は市場価格として変動しながら、生産＝消費、価値＝価格を具現するものとして現われることに注目しなければならない。「価格と価値の大きさとの間の量的不一致、あるいは価格の価値の大きさからの背離の可能性は、価格形態そのもののなかにある」という価値と価格との関係の指摘が、市場価格の変動として、以上のように具体化される必要がある。

このような具体化が、なぜ必要であろうか。とりわけ「恐慌の考察にさいして重要な点」と、なぜなるのであろうか。その理由はこうである。

いうまでもないことだが、『資本論』全巻を通じて価値＝価格という大前提が貫かれている。資本循環の考察にさいしても、例外ではない。

しかし、このことは価値水準が不変だ、という意味ではない。むしろ逆であって、「相対的剰余価値の生産」の篇においても、「資本の蓄積過程」の篇においても、資本がいかに商品価値の低下に狂奔するかが叙述されている。

したがって、価値＝価格の大前提は、価値水準の絶え間ない変動を含む前提だ、と考えねばなるまい。これに関する示唆が、「資本循環」の篇で、いくつか与えられている。「資本主義生産を特徴づけている労働の生産性における不断の変動だけによっても、まさに資本主義生産にとって、価値比率の不断の変動は特有のものである。」<sup>5)</sup>「あらゆる価値革命にもかかわらず、資本主義生産が存在し、存続しうるのは、資本価値が増殖されるかぎり、すな



わち、独立された価値として、その循環過程を描くかぎりにおいてのみであり、したがって、価値革命がなんらかの仕方でも克服され、相殺されるかぎりにおいてのみである。』<sup>6)</sup>

ところで、価値＝価格の大前提のもとで、価値比率の水準が絶えず変動するとすれば、価値とこの変動を媒介する市場価格との関係はどう考えるべきだろうか。『資本論』第3巻では変動する価値水準を「市場価値」範疇で表現する。したがって価値＝価格の大前提は市場価値＝市場価格の関係として具体化されているといつてよいだろう。もっとも「生産資本の循環」が扱われている第2巻では、市場価値範疇はまだ現れないから、『資本論』の体系に忠実に議論しようとするれば、ここでの価値は第3巻に登場する「市場価値」だということを念頭に置けばよい。

さて、価値水準も価格水準も変動するという事態のなかで、資本はどのような循環を行なうであろうか。あるいは、どのような価格を前提にして大量生産を継続するであろうか。

すでにのべたように資本の循環継続にとって望ましい条件は価値比率一定である。だが現実における資本の競争にとって、そうした条件が望みうべくもないことはいうまでもない。したがって、そうした条件を満たすに足る、さまざまな方策を考えねばなるまい。「生産資本の循環」篇で採り上げられている「予備基金」は、その一つであろう<sup>7)</sup>。これについては、ここでは指摘だけにとどめておく。産業資本の循環の継続にとって、基本的に重要なことは、価値比率の一定だとすれば、資本はさらに、どのような方策を講じるであろうか。商業資本による一定価格での大量生産の保証である。あるいは標準価格での商品購入の保証と、いってもよい<sup>8)</sup>。つまり「仮空需要」を想定して行動する商業資本にとって、市場価格変動のリスクを負担した形態での標準価格取引だ、といつてもよいであろう。いいかえれば、市場価格の変動を「仮空需要」と「最終需要」との間に設定して、産業資本と商業資本との取引を標準価格で行なうという方式である。

この方式によって、産業資本は価値比率一定の大量生産を行ないえ、商業資本は市場価格の変動に、その投機利潤を賭けるのである。標準価格の基準となるものが、市場価値であることは、いうまでもない。

このようにして、生産過程＝市場価値、流通過程、標準価格⇔仮空需要、市場価格⇔最終需要という、価値と価格との関係が成立する。もちろん、市場価値も標準価格も不変ではない。一定の時期に一定だ、というに過ぎない。このことは、当然のことながら、個別資本が市場価値以下に商品の個別価値を切り下げて「特別剰余価値」を入手しうることを否定するものではない。逆に標準価値が一定であればこそ、特別剰余価値の入手が安定した形で可能になり、生産の拡大をも伴うのだといってよい。商品の個別価値の低下によって需要の拡大が続くかぎり大量生産は継続され、商業資本は市場価格上昇による投機利潤を楽しむことができる。そのかぎりでは生産の増大は、まさに資本と資本との関係だけで進む、と考えてよい。

このような資本間取引が、それだけで投機的な在庫形成をもたらし、また個人所得の増大を刺戟することは、いうまでもない。だが、生産を終局的に制約するものは「最終需要」である。資本間取引による投機的生産は、この制約によって崩壊するであろう。その場合には商業資本による「仮空需要」ではなく「最終消費」が市場価格の決定権を握り、標準価格は、もはや生産の指標とはならないであろう。支払手段決済のための投げ売りによる価格崩壊は、極限にまで達するであろう。

生産資本循環における「恐慌の考察にさいして重要な点」とは、以上のべたように、流通過程における「仮空需要」と「最終需要」という需要の二重構造、それに対応する「標準価格」と「市場価格」という価格の二重構造を理解してこそ、その重要性が解明しうる、といえるだろう。

再生産表式における I、II 部門間の均衡成立も、資本相互の取引のうえに成立している均衡であると考えれば、標準価格の崩壊によって均衡の破壊は当然にもたらされるものと、考えるべきであろう。表式の均衡破壊を W—G

の、いわゆる「命がけの飛躍」といわれる実現の困難性だけで説明するのは、表式が展開されている『資本論』第2巻第3篇での論理次元にたいする無理解にもとづくものと、いわざるをえない。

第3巻第3篇「利潤率の傾向的低下法則」第15章「法則の内的矛盾の展開」において、再生産表式を念頭においたうえで、利潤率低下と恐慌との関連が叙述されているが、利潤率の低下が、なぜ恐慌に結びつくかは、標準価格の崩壊を媒介とすれば、きわめて容易に説明できるであろう。

いずれにしても、「生産資本循環における“恐慌の考察にさいして重要な点”」は、恐慌現象分析のための、無視できない媒介環の役割を果たすものだ、と断定することができるだろう。

### 3

さて、結論を兼ねて、いわゆる「命がけの飛躍」といわれるW—Gについて、われわれの立場からの再検討を加えておこう。それによって、以上のべた流通過程の二重構造の理論的意義と、『資本論』体系に占めるその論理段階が一そう明らかになるであろう。

まず『資本論』第1巻第1篇第3章「貨幣または商品流通」第2節「流通手段」(a)「商品の形態転換」で展開されるW—Gに関する次の叙述を考察してみよう。

「W—G 商品の第1の形態転換または販売。商品価値が商品の体から金の体にとび移ることは、私が他の箇所でも名づけたように、商品の命がけの飛躍である。もしそれが失敗すれば、商品は別に困ることはないが、商品所有者はたしかに苦しむ。社会的分業は、彼の欲望を多面的ならしめるのと同じように、彼の労働を一面的ならしめる。まさにそのためにこそ、彼にとって彼の生産物は交換価値としてしか役に立たぬのである。だが、彼の生産物が一般的な社会的に妥当な等価形態をうけとるのは貨幣においてに他ならず、しかもその貨幣は他人のポケットにあるのである。貨幣をそこから引き出す

ためには、その商品はなによりもまず、貨幣所有者にとって使用価値でなければならない。すなわち、その商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されていなければならない。または、社会的分業の一環であることを立証しなければならない。しかしながら分業は一つの自然発生的な生産有機体であって、その構造は、商品生産者たちの背後で織りあげられたのであり、また織りつづけられてゆくのである。その商品は、ある新しい労働様式の生産物であって、ひょっとすると、新たに生じた欲望を満たすためになされたものであるかもしれないし、あるいは自分の力で、ある欲望をこれから呼び起そうとするものであるかもしれない。昨日なお同一生産者の多くの機能のなかの一機能であっても、ある特別の労働操作が、今日はおそらくこの関連から脱して、独立化し、まさにそれゆえに、その部分生産物を独立の商品として市場に送る。事情は、この分離過程にとって熟しているかもしれないし、熟していないかもしれない。その生産物は、今日はある社会的欲望を満足させる。明日は、全部または部分的に、他の類似の種類の商品によって、その地位から追われるかもしれない。……だが仮に彼の生産物の使用価値が立証され、したがって貨幣がその商品によって引き寄せられると仮定しよう。ところが今度は、どれだけの貨幣が、という問題が生じる。答えは、もちろんすでに商品の価格、その価値の大きさの指数によって、先廻りして与えられている。われわれは、商品所有者が、純粋に主観的な、いって見れば計算の誤りをする、というようなことを無視しよう。これは、市場でただちに客観的に訂正される。彼はその生産物にたいして社会的に必要な平均労働時間だけを支出したはずである。したがって商品の価格は、その中に対象化されている社会的労働の定量の貨幣名であるにすぎない。しかし、わが亜麻布織職の許しなく、また彼の知らないうちに、亜麻布職の古くから行なわれている生産諸条件が、はげしく動いていたかも知れない。昨日疑いもなく一エレの亜麻布の生産にたいして社会的に必要な労働時間であったものが、今日では、そうではなくなっているかもしれない。このことを貨幣所有者が

熱心に、わが友人のいろいろな競争者の値段づけから、明らかにしてくるのである。』<sup>9)</sup>

いうまでもないことだが、ここでは二つの問題が採り上げられている。

第1は、商品が使用価値として販売されるかどうかの問題、つまり商品販売の困難性と偶然性の問題。

第2は、商品価値が価値どおりに、価値＝価格で実現されるかどうかの問題、いいかえれば価値＝価格実現と市場との関係がそれである。

ここは、かつて商品価値決定の生産説か需給説かの論争を呼んだ点だが、論争についてはここでは触れない。

われわれにとって関心があるのは、「恐慌の可能性」の一つといわれている、商品の、いわゆる「命がけの飛躍」が、このままで、生産資本循環の説明に使用できるか、という点である。

「恐慌の可能性」で扱われているのは、単純商品生産であって、資本主義生産ではない。資本主義生産から抽象された典型的な単純商品生産といった方が、より適切であるかもしれない。したがって、そこで前提されているのは資本主義的大量生産でもなければ、資本主義的大量消費でもない。生産手段の私有のもとにおける自然発生的な社会的分業体制内での商品生産の一般的かつ歴史的な特殊性についてふれているにすぎない。

資本主義的大量生産は、想定された価格のもとでの大量消費を前提している。想定された価格で、予想された量の消費が実現されるかどうかは保証のかぎりではないが、資本主義生産といえども、そうした計画性がなくては大量生産は不可能であろう。商業資本による「仮空需要」や「標準価格」の設定が必要なのはこのためである。「仮空需要」は「最終消費」によって、「標準価格」は「市場価格」によって調整される。商品価値実現上の「命がけの飛躍」は、「最終需要」と「市場価格」によって、具現されるのである。

つまり、さきにもべた流通過程の二重構造は、この意味では、単純商品生産のもつ矛盾を、資本主義的に止揚したものであり、したがってまた、その

矛盾をより拡大した形で包摂し展開するものだ、といえよう。

この限りでは、「恐慌の可能性」と再生産表式を直接に結びつけて、恐慌分析を試みようとする方法は、『資本論』の体系上、論理次元の異なるものを結びつけるという誤りを犯しているもの、といわざるをえない。

さきにものべたように、「生産資本循環における“恐慌の考察にさいして重要な点”」の解明は、「恐慌の可能性」を具体化するうえで、きわめて重要な役割を果たすだけでなく、「恐慌の可能性」と再生産表式の理論的結びつきを媒介する「媒介環」の役割を果たすもの、といわなければならない。

〔注〕

- 1) Das Kapital, Dietz Verlag, Berlin 1963, Bd. II, S. 80-81, 向坂逸郎訳, 第2巻, 86-87 ページ。
- 2) これまでの『資本論』研究では, 第2巻第1篇第6章「流通費」で展開されている諸事項, とくに第2節「保管費」で扱われる在庫については殆んど考慮が払われていない。恐慌論研究を深めるために在庫の研究は欠くことができないと思われる。
- 3) Kapital, Bd. II, S. 74-75, 向坂訳, 第2巻, 79 ページ。
- 4) Kapital, Bd. I, S. 118, 向坂訳, 第1巻, 135 ページ。
- 5) Kapital, Bd. II, S. 78, 向坂訳, 第2巻, 83 ページ。
- 6) Ibid., S. 109, 向坂訳, 第2巻, 122 ページ。
- 7) 恐慌と信用との関係を検討するさいに「予備基金」の研究は避けることはできない。
- 8) 商業資本が提供する「標準価格」を考えるさい, われわれは, いわゆる「建値」制度や商品取引所における「先物取引」を念頭においている。
- 9) Kapital, Bd. I, S. 120-21, 向坂訳, 第1巻, 139-40 ページ。